

学生海外調査研究	
Henry James, <i>The Princess Casamassima</i> 自筆原稿の調査： <i>The Princess Casamassima</i> 自筆原稿に見られる社会的要因と心理的要因の混在	
松浦 恵美	比較社会文化学専攻
期間	2009 年 9 月 6 日～2009 年 9 月 18 日
場所	アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン
施設	ハーヴァード大学ホートン図書館

内容報告

1. 調査概要

私は、アメリカ・ボストンのハーヴァード大学ホートン図書館にて、2010 年 9 月 6 日から 9 月 18 日にかけて、Henry James 中期の長編小説 *The Princess Casamassima* の直筆原稿の調査を行った。

同図書館は、ニューイングランド地方で活躍した作家を中心に、その原稿や初版本および稀覯本を集めた図書館であり、アメリカ文学の研究を行う上で非常に重要な資料を多数収蔵している。また、ジェイムズ関連の資料としては、自筆原稿、手紙、ジェイムズ家の家族の写真、ジェイムズ存命中の出版物約 100 点（内初版本が多くを占める）、今日までの出版物約 900 点を収めている。ジェイムズの残した資料に直接触れ、さらにその膨大な出版物の概観を得ることのできる貴重な施設である。

2. 調査の対象と調査方法

今回の調査において主要な対象となったのが、1885 年から 86 年にかけて *The Atlantic Monthly* 誌に連載され、1886 年に本として出版された *The Princess Casamassima* の自筆原稿である。この時期、ジェイムズはそれまでの国際的主題を扱った小説群から離れ、社会的問題を積極的に取り上げている。同時期に執筆され同じく 1886 年に出版された *The Bostonians* がアメリカにおける女性運動を扱っているのに対し、*The Princess Casamassima* はロンドンの地下テロ組織とその暗殺計画、およびその中心となったロンドンの労働者の生活を主題としており、ジェイムズのテキストにおいては異色の作品であるとされている。これらのジェイムズ中期の作品は、前期の国際小説、円熟期とされる後期の心理的小説に比べて、文学批評においては長らく軽視される時期が続いた。しかし最近では、9/11 後の世界で最も大きな問題の一つであるテロリズムの問題および暴力の表象への関心の高まりと、ジェイムズのテキストにおける政治的・社会的側面への考察が求められ

ていることから、このテキストは改めて批評の重要な対象となってきた。

今回の直筆原稿の調査にあたり、特に考察の対象としたのは以下の点である。

まず、テキストにおける社会的主題の扱われ方についてである。ジェイムズは登場人物の心理的な側面の描写とそれを描くための視点の操作において優れており、批評においても心理的側面や小説技巧が長年重要な分析の対象となってきた。一方で、実際の生活を描写することや社会的問題を扱うことについては、描写が不十分である、または内容が空虚であると否定的な評価がなされてきた。こうしたことも、中期の作品にあまり目が向けられてこなかった理由の一つである。しかし、*The Princess Casamassima* はロンドンの労働者や都市生活者、貧困層の生活を比較的丹念に描いている。これらの描写を、テキストを生産する段階においてジェイムズがどのように行ったのかは興味深い問題である。

それと関連して、登場人物たちの造形に注目した。ジェイムズの作品に主に登場するのは、アメリカの中産階級またはヨーロッパの中・上流階級の人物たちである。しかしこのテキストで中心となるのはロンドンの労働者階級であり、またその種類も、上の階級と交流を持たない男性中心の工場労働者から、ファッションを介し上流階級に積極的に交わろうとする女性の服飾関係の労働者まで、幅広く登場している。これらの、ジェイムズにとっては馴染みの浅い階級に属する人物の描写がどの程度細かく、確信を持って行われているかを、原稿にあたって調べるのは興味深い問題であると考えた。さらに重要となるのが、これらの人物の政治的思想である。ジェイムズ中期のテキストがそれ以外の時期と大きく異なるのが、その政治的コミットメントの姿勢である。ほかの作品において、ジェイムズの政治的な姿勢をうかがうことは、多くの場合間接的にのみ可能である。たとえば、前期の終りに発表された代表作 *The Portrait of a Lady* において、イギリス貴族で上院に

議席を持つウォーパトン卿が、貴族による政治や土地の占有に否定的な見方を持っていることが示されている。しかし彼自身が特権を持つ階級にあるため、この態度は混乱を含むものとして表象されている。一方で *The Princess Casamassima* では、下層階級の政治的不満が中心となっているため、その表象はより直接的で暴力的なものはらんだものとなっている。しかしその表象は一枚岩的なものではなく、テロリスト運動にかかわる登場人物の一人ひとりが、たがいに微妙な差異を含んだ思想を抱いていることがうかがわれる。彼らの政治的思想がどのように生み出されているか、さらに各人の思想の違いは何かを細かく分析することが重要であり、そのためには原稿に残された推敲の跡を見ることが有効なアプローチの一つであると考えられる。

さらに、社会的主題から心理的主题への移行についても注目した。テロリズムという社会的・政治的問題を扱いつつ、プロットの展開の重要なドライブとなっているのはむしろ登場人物たちの心理の変化である。特に暗殺計画の実行役となる主人公ハイアシンス・ロビンソンの階級社会、階級に付随する文化の持つ意味、さらに階級の移動に関する考えの推移が、この計画の結末に大きな影響をもたらしている。彼が、上流階級にありながら社会変革に関わりた望むカサマシマ公爵夫人と出会い、さらに自らのルーツとなるフランスの文化に触れたことで、二元論的な階級の捉え方から遊離していく過程は、このテキストをテロリズムという主題そのものから逸脱させていく。さらにハイアシンスの行動に大きな影響をもたらす職工のポール・ミュニメントの革命運動に対する考えが明かされるテキスト後半の過程は、このテキストの階級闘争に対する姿勢を左右するものである。よってこのテキストには、社会小説から心理小説、およびテロリズムから脱テロリズムへの大きな移行が存在しているのである。これらの移行が、1年間の雑誌掲載という時間的な推移の中でどのように起こったのか、テキスト成立の過程と関連させて分析を行いたいと考えた。

以上の点についての考察を目標として、原稿の調査を行った。調査の方法は以下のとおりである。まず、事前に出版されたテキストを読み、上記の点について特に注目すべき個所にチェックをつけた。その上で直筆原稿を読み、書き直しや推敲の跡が見られる個所に印をつけていった。両者を突き合わせることで、テキストが生み出される段階において重要であった個所や問題をはらんでいた個所が発見できるのではないかと考えた。また、当初は出版元からの注記についても考察を行う予定であったが、これについては原稿への注記が事前の予想よりはるかに少なく、結果として作者による推敲に集中する結果となった。以上の方法により、ジェイムズが1880年代の社会状況とテロリズムという問題をどのようにテキストとして成立させていったのか、また社会

問題に対する姿勢がテキスト生産過程において変化したのか否か、変化したとすればどのような推移をたどったのかを考察することを目標とした。

3. 調査結果

調査を実際に行い、事前に準備した個所に推敲の跡が見られたところもあれば、逡巡の跡もなく書き進められたようである個所もあった。全体としてプロットの進行自体に大きな変更が施されたような跡はなく、微妙な表現の変更や修正、書き足しが目立った。また、修正前の文については、棒線で消されているため、読みとりは困難であった。これらの個所において変更が行われた理由については、今後さらに分析を加える予定である。特に考察に値すると思われる個所について、以下例をあげる。

まず、登場人物が最初に現れる箇所での人物描写において、作者が修正を多く加えていることが認められた。例えば、第2章における、ハイアシンスの後見人としてその成長を見守るヴェッチ氏についての描写である。まずヴェッチという名前が、かなり後になってから変更されたことが分かった。当初は別の名前であったようであり、物語がかなり進んだ後に棒線にて修正されていた。ジェイムズは登場人物の名前についてこだわりがあったようで、創作ノートには多くの名前の案が残されていることが知られている。ヴェッチ氏の名前については、プロットが進行した後で当初の名前がふさわしくないと判断された可能性があり、これについて考察の必要があると思われる。また、ヴェッチ氏の人物描写についても興味深い変更が見られた。ヴェッチ氏は、教養はあるが下町の粗末なアパートメントに住む貧乏な音楽家であり、またイギリス王室を公然と批判し、共和制に大きな共感を寄せている。ハイアシンスが地下組織と接触するきっかけを作った人物でもあるが、彼が組織との交流を深めることには大きな心配を抱いている。ヴェッチ氏には、思想的に先進的で反社会的である面と、卑小で小市民的な面の両方が存在する。原稿の修正箇所には、この相反する両面を、どちらかみの強調に傾かず十分に表現するように訂正を加えた様子がうかがえる。例えば、出版されたテキストには以下のように述べられている。

Mr. Vetch displeased her [Amanda] only by one of the facets of his character – his blasphemous republican, radical view, and the contemptuous manner in which he expressed himself about the nobility. (67)

下線部が、原稿において修正があった部分である。ジェイムズは、blasphemous（不敬な）という語を加えることによって、ヴェッチ氏の反社会的な面を強調している。一方で、それに続く部分では次のような修正を行っている。

He looked placid and genial, and as if he would fidget at the most about the ‘get up’

of his linen; you would have thought him finical but superficial, and never have suspected that he was a revolutionist, or even a critic of life. (67)

ここでは、ヴェッチ氏が革命的な思想を持ちつつ自分の背広の毛羽立ちを気にするような一面も持つことを示して、彼の一市民としての性格、および外見を気にする非労働者のな面を強調している。このような二面性は、革命的思想の持ち主を反社会的というイメージのみで一面化せず、むしろ彼の中にある繊細な側面、文化や上流階級への憧れ、そして貧しい音楽家という現状への不満という複数の感情が混在する状態を表象しようとしていると考えられる。よって、この個所の修正は反社会運動に内在する複雑なダイナミズムを表象しようとした一例であると考察できる。

また、第 21 章において社会主義者たちが「太陽と月」亭で集会を行う場面では、地下組織の持つ暗く激しいエネルギーを表現するために修正が加えられた跡が見られる。この場面はジェイムズのテキストの中でも異色の雰囲気を持っており、また、ハイアシンズがテロ計画の実行役になることを宣言するプロット上の重大な局面でもある。この個所における修正を見ると、作者が地下組織における暴力的なパワーとそれに参入していく主人公の行動をどう表わすかに大きな注意を払っていたことがうかがえる。ここで際立つのが、ハイアシンズの心理状態が彼の内面のみならずその場の雰囲気にまで放出され、内面と外界の区別が無化されているような描写がされていることである。

He [Hyacinth] took no part in the violence of the talk; he had called Schinkel to come round and sit beside him, and the two appeared to confer together in comfortable absorption, while the brown atmosphere grew denser, the passing to and fro of fire-brands more lively, and the flush of faces more portentous. (292)

このように、ハイアシンズ、仲間のシンケル、「太陽と月」亭の中の空気、その中の男たちの顔が混然一体となって暗い未来を予感させる雰囲気が表現されている。このような内面と外界の一体化は、社会運動と個人の心理の密接なつながりをジェイムズが強調しようとしたことの表れではないかと考えられる。また、続くハイアシンズの宣言の場面では、以下のような修正が加えられている。

I don't think it's right of him to say that. There are others, besides him. At all events, I want to speak for myself: it may do some good; I can't help it. I'm not afraid; I'm very sure I'm not. I'm ready to do anything that will do any good; anything, anything – I don't care a rap. In such a cause I should

like the idea of danger. I don't consider my bones precious in the least, compared without some other things. If one is sure one isn't afraid, and one is accused, why shouldn't one say so?

It appeared to Hyacinth that he was talking a long time, and when it was over he scarcely knew what happened. He felt himself, in a moment, down almost under the feet of the other men; stamped upon with intentions, of applause, of familiarity; laughed over and jeered over, hustled and poked in the ribs. (294)

ここではハイアシンズの宣言が忘我の状態で行われたこと、それに対し喝さいを送る男たちの荒々しいまでの歓喜、そしてそれにより彼らの内で絆が締結されたことを強調するような修正がなされている。ハイアシンズの宣言は、彼の政治的な姿勢よりむしろ組織における彼自身の居場所を築くこと、そして彼が憧れを抱くポール・ミュニメントに認められることを望む感情からなされている。この場面がハイアシンズおよびそれを受け入れる仲間たちの感情によって支配されていることを強調することにより、ジェイムズは政治的行動において心理的要因が決定的な役割を果たすことを描いたと考えられる。このように、これらの場面にみられる修正は、社会運動を政治的理由や外的要因からではなく心理や運動に参加する個人の内面的な理由との関係においてとらえようとする傾向を反映していると考えられる。さらに、この心理的なドライブを強調させることが、このプロットの進行をさらに加速させるために不可欠であったことが読み取れる。

ハイアシンズの心理的側面が彼の行動を大きく左右する一方で、彼をテロ活動にまい進させる理由となったポール・ミュニメントが果たした役割も、このテキストが進行する上で重要な要因である。彼が登場する場面に修正がなされているかどうか、事前の準備の段階で注目していた点の一つであった。しかし、実際に原稿にあたってみると、ミュニメントの登場場面や彼の考えが明かされていく場面において、修正はそれほどみられないことが分かった。例えば、第 30 章のミュニメントの独特な性質が表されている部分を見てみる。

Muniment's absence of passion, his fresh-coloured coolness, his easy, exact knowledge, the way he kept himself clean (except for the chemical stains on his hands), in circumstances of foul contact, constituted a group of qualities that had always appeared to Hyacinth singularly enviable. (391)

テキストの後半に改めて述べられるミュニメントのこうした冷静さ、地下活動組織の中核にあつて、前

述の場面で集った男たちとは対照をなすような情熱に欠けた性格は、このテキストで扱われているテロ活動の暴力的な側面と大きな対照をなしている。また、この後彼はカサマシマ公爵夫人と奇妙な親密さを打ち立てていくのだが、上流階級の人物が社会運動に参入することに否定的な姿勢をはっきりと示していた彼が公爵夫人と面会を持つことは、プロット上での大きな転換をなしている。しかしその場面においても目立った修正の跡は見られなかった。つまり、ミュニメントの人物造型と彼の行動については、作者には確固とした構想があり、テキストはそれに従って書き進められていったのではないかと推測することができる。よって、ミュニメントのキャラクターを分析するためには、テキストより前の段階の創作ノートの記述を確認する必要があるということになる。また同時に、このテキストのみに留まらず、ほかの作品における人物との比較や、批評家たちによる様々な分析などを参照し、間テキスト的な考察を行うことが必要となるであろう。

以上のように、*The Princess Casamassima* の直筆原稿の調査から、ジェイムズが社会運動を積極的に扱いつつ、同時にテロリストとなる主人公の心理的側面、および彼と仲間の男性たちとの心理面における接触が大きな中心となっており、両方の要因がプロットの進行とそこでの主人公ハイアシンスの変転とに複雑に絡み合っていることが認められた。これらの発見は、テキスト成立過程においてジェイムズがどちらかの要因に傾くのではなく、むしろこの二つの面が分かちがたく関係し合っていることを表そうとしたことを裏付けていると考えられる。また、これらの修正箇所は、連載の過程においてテキストが社会小説から心理小説に移行したというよりは、社会と心理の両面を十分に表わすという姿勢が一貫して存在していたということを感じさせる。これは、ジェイムズの社会の捉え方、現実の運動に対する内面的な運動の影響の重視などについて分析を行うための材料となるだろう。さらに、原稿を調査したことで、テキスト生産以前の段階で生起したと思われるジェイムズ独特の社会問題に対する姿勢があることも改めて確認された。このような問題の存在を意識しつつさらに多くの資料にあたって分析を進めることで、*The Princess Casamassima* というテキストが持つ複雑な問題と要素の絡み合いを、より精緻にひも解くことができると期待する。

4. 今後の課題

今回の調査の結果は、今後の研究発表および博士論文執筆のための土台とする予定である。まず、*The Princess Casamassima* について、アメリカ文学会東京支部での学会発表を目標としている。その際、今回の調査の結果を生かし、テキストにおける社会的側面と心理的側面の共存、および両方の要因の積極的な関わり合いによるプロットの発展と、このような複数の要素の相関的な関係を重視するジェイムズの姿勢について分析を行いたい。また、博士論文では、ジェイムズのテキスト全体にみられるさまざまなアイデンティティの混在、その分断不可能な移行について、中期から後期のテキストを中心に論じる予定である。特に、中期の実験的ともいわれる作品群は、ジェイムズのテキストにおける多面的な要素と、社会的問題が個人の中に内面化されさらに彼ら自身の行動として外界に反映されていく様子を考察する上で重要なテキストである。これらのテキストの分析から始めて、再び国際的テーマを扱った後期のテキストの中で個人と政治性の問題がどのように表象されているか、考察をしていく予定である。文学の研究においては、さまざまな文献が書物としてすでに発行されていることから、どうしても二次的な資料に頼ることが多くなる。そのため、第一次資料の分析を再度行うということは、その困難もあり、なかなか試みられていない。しかし今回、本プロジェクトの援助を受け直筆原稿の調査を行ったことで、出版されたテキストだけを見ていては分からない発見や今後の研究の指針を得ることができた。今回研究を行ったホートン図書館は、ハーヴァード大学在學生に限らず世界中の研究者に広く門戸を開いた施設であり、その充実した蔵書内容や運営姿勢、および図書館職員の知識と研究者に対する協力的で温かい姿勢には深い感銘を受けた。さらに、ホートン図書館で様々な資料を研究する各国の研究者の姿を見て、文学研究の国境を超えた広がりや各分野の深さ、さらにその研究に従事する世界中の研究者の真摯な姿勢を知った。今後も、研究の過程及び発表の両面において、国内にとどまらずあらゆる場所で活動を行うことを常に念頭に置いていく所存である。

参考文献

James, Henry. *The Princess Casamassima*. 1886. London: Penguin, 1987.